資料１－２

曽爾村農林業公社（そにのわ）を起点にした持続可能な暮らし・地域づくり

一般社団法人曽爾村農林業公社 事務局長（曽爾村企画課付出向）　高松和弘

本日お話しさせていただくこと

1．曽爾村の概要
2．曽爾村農業と農協、農林業公社設立
3．公社の存在意義
4．何十年先も農業を続けられる仕組みづくり
5．食を通して地域を結ぶ

奈良県　曽爾村の概要

人口　　1,295人（2023年11月1日）

面積　　47.76km2

耕地　　1.29km2（ 2.7%）

山林　41.32km2(86.5%)

標高　　400～450m

気候　　内陸性気候

2018年　平均降水量　　2,315mm

（参考：奈良市　1,646mm）

平均気温　　13℃

月平均気温	8月	12月
奈良市	28．7℃	7．8℃
曽爾村	25．5℃（△3．2）	2．2℃（△5．6℃）

地域資源

曽爾高原

奈良・三重県境にある室生赤目青山国定公園である曽爾高原（そにこうげん）は、奈良県宇陀郡曽爾村大字太良路にある高原。倶留尊山（標高1038メートル）と亀山（標高849メートル）の西斜面から麓に広がる高原で、平坦地の標高は約700メートル、面積は約38ヘクタール。

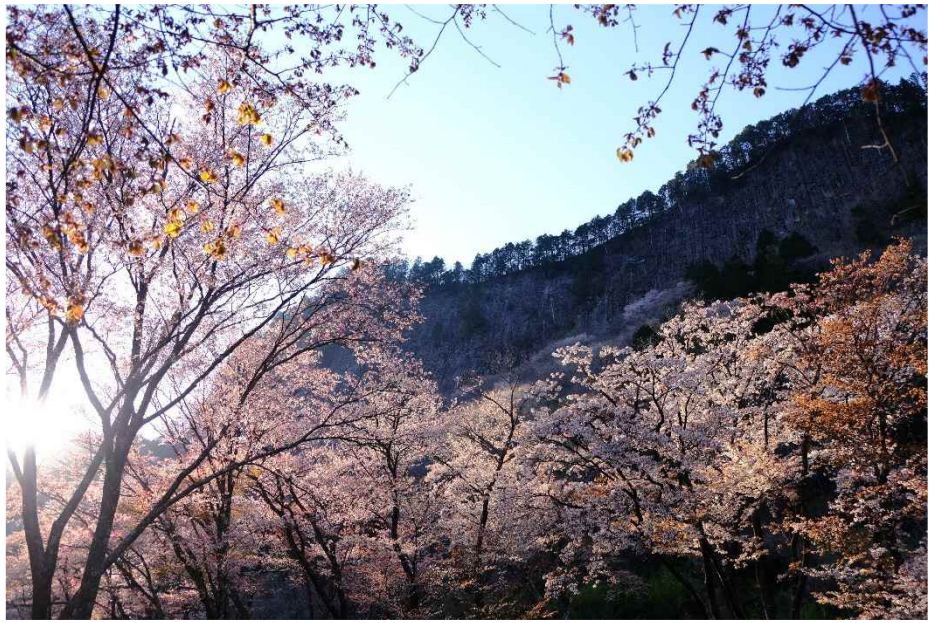
かつての茅葺き屋根の材料である茅の供給拠点。春になると山焼きが行われ、秋には「お亀池」という湿地帯を除いて一面がススキに覆われる。

年間５０万人のアウトドア客を迎える。

地域資源

屏風岩公苑

村の大半を占める山地は室生火山群に属し、西側の岩肌もあらわな屏風岩、鎧岳、兜岳などの珍しい柱状節理の美景は国の天然記念物に指定されています。



地域資源

曽爾高原温泉「お亀の湯」

曽爾高原の麓にあり、泉質はナトリウム－炭酸水素塩温泉で重曹成分が多く含まれる「美人の湯」。温泉シールラリー「ゆらん」の泉質ランキングで中日本1位。露天風呂からは屏風岩、兜岳、鎧岳が大パノラマで眺望できる。

漆塗り発祥の地

「以呂波字類抄」引くところの「本朝事始」に、倭武皇子が宇陀の阿貴山に猟に行ったとき、木の枝を切ると黒く染まり、その汁を集めて持ち物に塗ると美しく染まったので、この曽爾の郷に漆部造をおいた。これが日本のウルシ塗りの始まりといわれる。この漆部の人々が曽爾川沿い一帯に住み、漆塗りの原汁を採集して、朝廷（奈良―平安朝）に奉ったとされている。

漆の苗の植樹

曽爾の獅子舞

曽爾村の中心部にある門僕神社（かどふさじんじゃ）で毎年10月に奉納される「曽爾の獅子舞」は、約300年の歴史があり豪快な舞いや所作の美しさから、県の無形民俗文化財に指定されている。

農業

■明治期

米、茶、葉煙草、桑、養蚕が産業の中心

■現在

昼夜の寒暖差や豊富な湧き水を生かし夏秋はトマト、冬はほうれん草などの葉物野菜や米の栽培が盛んだが、後継ぎ不在にともなう農家の高齢化が課題。

→主要作目のトマト、ほうれん草とも生産規模は縮小

トマト：年間20万玉（1ha）

ほうれん草：約66万束程度(38ha)

曽爾村農業と農協

≪トマト、ほうれん草の販売≫

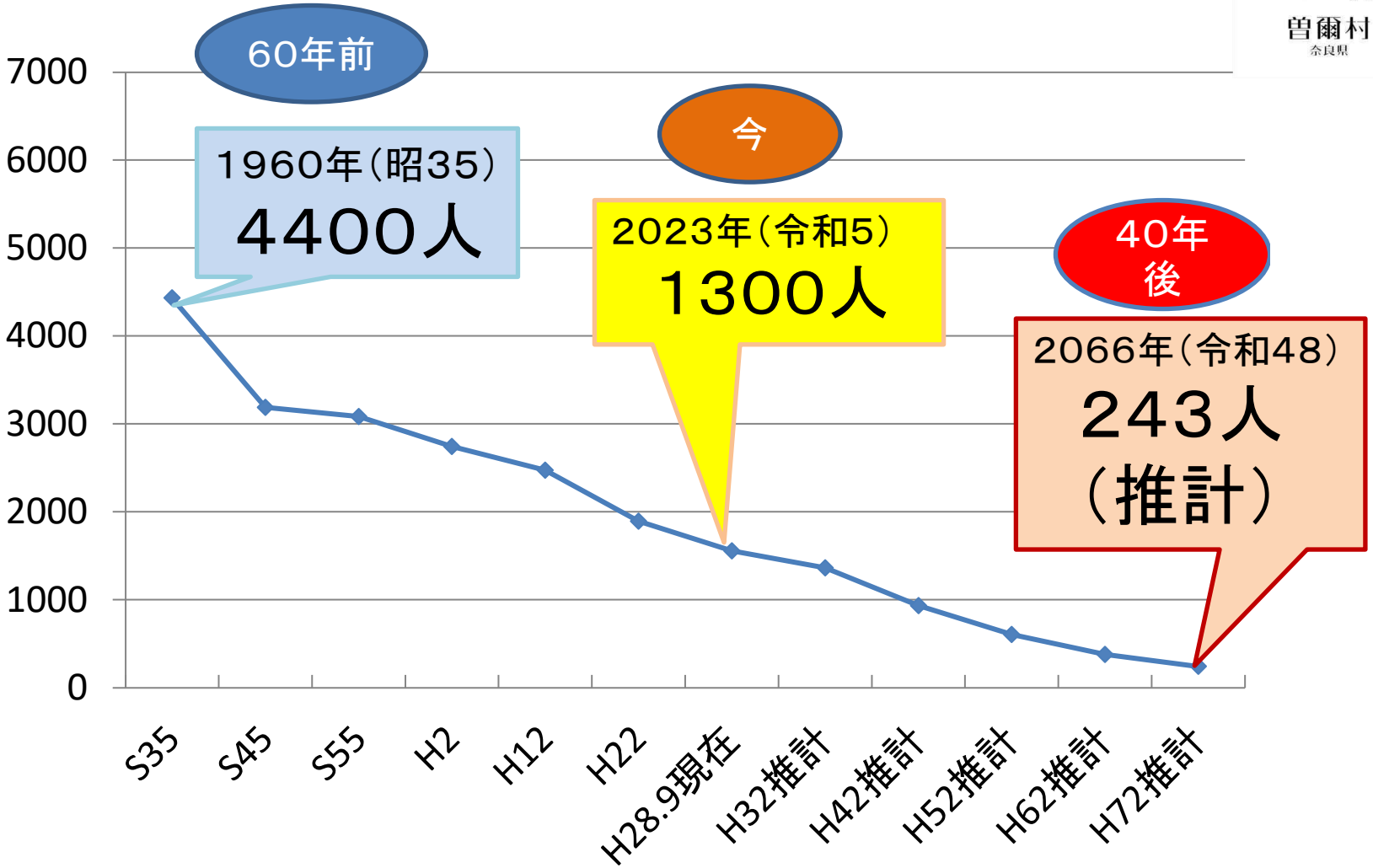
・曽爾村農協が生産者部会を組織し、全量委託販売
1991年：宇陀郡農協へ統合
1999年：当時全国初となる県域農協
（奈良県農業協同組合＝ＪＡならけん）へ統合

その結果

●村単独課題への注力が困難に
●営農指導や販売に長けた人材、地域に精通した人材の流出
●販売先が奈良県中央卸売市場内の一社のみ
有利販売につながる価格交渉が実質的に成立せず

・販売力の弱体化による所得低下は、後継者が育たない一因に
・曽爾村の野菜産地振興をＪＡ単体で担うことが難しい状況

曽爾村の人口推移


60年前
1960年（昭35）
4400人
今
2023年（令和5）
1300人
40年後
2066年（令和48）
243人
（推計）
7000
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
S35
S45
S55
H2
H12
H22
H28.9現在
H32推計
H42推計
H52推計
H62推計
H72推計

一般社団法人曽爾村農林業公社設立の契機

2014年：内閣府「まち・ひと・しごと創生」に関する政策（地方創生）

村民・役場職員が何度も集まり、
「今、村ですべきことは何か」について議論

役場職員によるワーキンググループ9回、住民会議5回、9つの集落（大字）でのワークシップ各1回

●農業課題への村挙げての対応
●観光振興公社との両輪での地域活性化
●雇用の創出の必要性（創業比率が全国ワースト40位）

2016.6.24 曽爾村農林業公社設立総会

官民協働で農業の魅力化図る「曽爾村農林業公社」を立ち上げる方向性
「曽爾村地域イノベーション創生総合戦略」（2015年12月策定）

2016年6月24日　「一般社団法人曽爾村農林業公社」を設立
（設立者：役場、JA、森林組合、観光振興公社、農業委員会）

しんしんけんび
心身健美

曽爾村に暮らす人、訪れる人が、
心もからだも健康に生きていくための架け橋に
自然に寄り添い、大地の恵みをいっぱいに受けた食べ物を食す。
村に宿る豊かな資源と、紡がれてきた伝統を守っていく。
地域の困りごとを仕事に変え、ひとりひとりが毎日を楽しく、健康的に暮らしていける村。
便利さに頼らない本来的で持続可能な暮らし方、働き方ができる村へ。

農林業をベースとした、地域で暮らす人々が豊かさを感じる村づくりにシフト

人のくらしを支える「食や農業」を一つの軸に（農地保全、産業振興、つながり構築）

農林業公社の存在意義・ビジョン

食と農を軸に地域が内側から豊かになっていく土壌を築くこと

そにのわ
SONINOWA

多様な農業者・村民が、曽爾村の地域資源を軸に未来志向でつながり、学び合いながら、豊かな暮らしを営む。一人ひとりが内発的な幸福感を持つことができる状態を創出する

産業政策の側面

農業産地育成支援

持続可能な暮らしを可能にする多様な農業モデルの構築により、曽爾村が連綿と築いてきた農業を、新たな移住者も迎えながら実現する

※農産物流通販売事業（販路構築、流通システム、米ブランド化、規格外トマト）、新規就農支援事業

社会政策の側面

農地保全

高齢化により個別で農地の維持管理が難しくなる中、作業の部分受託を中心に農地を守る仕組みを運営する

※農作業受託事業、農地管理支援事業

地域づくりの側面

地域価値・関係性創出

足元の地域資源に目を向け、その価値を顕在化することにより、村に暮らす人が村の価値を再認識し、誇り・幸福感を持てるとともに、人が集い、新たなチャレンジを起こす機運を醸成する

※地域イノベーション事業、薬草、そにのわマルシェ

村の農業の未来にとって真に大切なものを前例にとらわれず柔軟に、スピーディーに実施

曽爾村農林業公社の事業内容

□農業振興事業
・担い手育成
・農作業受託
・米ブランド化（生産振興・仕入れ・販売）
・米の加工品開発・販売
・対面・オンラインによる農産物販売
　（マルシェ、定期宅配便、卸販売）

□薬草事業
・大和当帰の生産振興・仕入れ販売
・榧の実の仕入れ・商品製造・販売
・ホップの生産・販売

□地域イノベーション事業
・葛、塩井、小長尾、太良路、長野地区の特産開発支援
・対面・オンラインによる商品販売

□林業振興事業
・製材拠点を活用した薪の製造・販売
・森林資源を活用した体験プログラムの企画運営

公社立ち上げのねらい

「何十年先も農業が存続していく仕組みづくり」

曽爾村で農業を始める▸続けられる環境の整備

＋

農家の収益確保に向けた農産物の有利販売

（JAがカバーしきれない領域へのテコ入れ）

新規就農者育成

①地域おこし協力隊制度を活用した3ヵ年での農家育成研修

H28.4～H31.3　第一期
トマト2名、ほうれん草2名
→4人とも定住・新規就農へ

R2.4～第二期
トマト3名　　就農目指し絶賛研修中！

地域おこし協力隊制度を活用した
3ヵ年の農家育成制度（トマト・ホウレン草）

移住1年目		2年目	3年目以降
スタートアップ期 ■4月 農家のもとでトマトの定植など基礎作業の学習 ■5月～7月、9月～11月 事前研修（6週間） （奈良県農業大学校） ◎1年目　地域おこし協力隊の報酬（年200万円）	**本格的なOJT研修開始** （5月～） 先輩農家のもとでの定植、栽培、収穫、調製作業を研修します。 ※作業日誌を提出していただきます	**独立準備期間** 先輩農家のハウスの一部を担当。適宜アドバイスを得ながら、実際に収穫物を販売。自立経営のシミュレーションをしていただきます。 ◎2年目　地域おこし協力隊の報酬（年200万円）	**独立準備、独立** ご希望に応じて村から畑を提供。ビニルハウスを設置して、自分の畑で周年栽培。JA出荷のほか、独自で販売ルートを探すことも可能です。 ◎3年目　地域おこし協力隊の報酬（年200万円） ◎4年目 以降　青年就農給付金（年150万円、最長5年間支給）

■村内の農家が集まる生産部会で定期的にミーティング＆懇親の場も
■栽培技術を磨くだけでなく、ブランド化のアイデアや戦略を練っていただきます

新規就農者育成

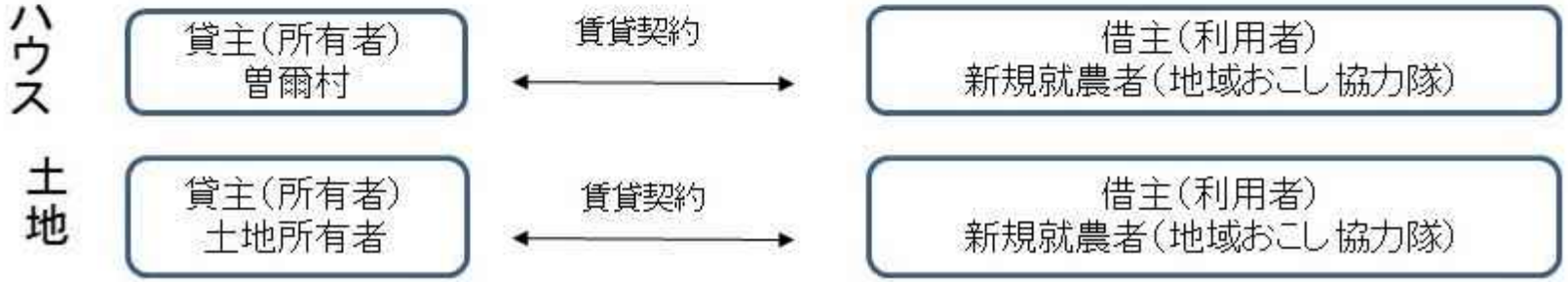
≪リースハウス制度≫

〇村が建設したハウスで営農を開始

〇12年かけて総額の3割を返済後に所有権移転

研修期間中（～H31．3．31）　ハウス使用者：曽爾村農林業公社　1年目

就農開始後（H31．4．1～）　ハウス使用者：新規就農者（元地域おこし協力隊）2～12年目



既存農家の生産支援（農作業受託）

・田植え機・収穫機の導入による事業開始

・5年先の需要増大を想定

オペレーター育成を通じて
水田農業の担い手を育成

農産物ブランド化

≪曽爾米≫

湧き水や寒暖の差を生かした曽爾村の米は良食味だが、JAによる県域流通で「奈良県産」として販売され、付加価値を出しにくい(**60kg1万2000円**)

【栽培面積】1970年　120ha→2015年　44ha

2016年4月　曽爾米ブランド化協議会発足

〇山形県高畠町の遠藤五一氏の指導受け、
　減農薬・有機肥料栽培へのシフト（2ha）
〇JAライスセンターにおける籾すり・乾燥
　色彩選別→農林業公社で精米・包装。

「曽爾米」と命名し、公社が開拓したルートに販売。（精米1kg800円）
→農家手取りは**60kg2万円超**

・課題は面積拡大（現状2ha）と加工品開発

2016年12月
「米・食味分析鑑定コンクール国際大会」
特別優秀賞受賞

・日本国内外から5600検体が出品される国内最大の米食味コンクールに
　曽爾米ブランド化協議会で出品

・多様な生き物を育む環境にやさしい水田を対象にした「水田環境特A部門」で
　最優秀賞に次ぐ特別優秀賞を受賞

・湧き水を使った曽爾米の美味しさが
　この場で証明され、販路は拡大した

「曽爾米」販売の流れ

JAと競合するのではなく共存共栄を目指す

生産者

出荷

支払い①

JA

乾燥調製・低温保管

買い戻し

曽爾村農林業公社

支払い②

精米機

白米販売

直売所
百貨店

玄米販売

米穀店

曽爾米のファンづくり

曽爾米を継続的に取り扱っていただける相手との関係づくりを進めています

奈良旧市街のホテル「セトレならまち」

宿泊客の朝食メニューの大半を曽爾村の食材でまかなっていただいている。

「曽爾米」を使ったONIGIRI（おにぎり）の提供

R5.2.16 [SETRE OPEN KITCHEN]開催
その日提供する料理をつくるシェフと、素材をつくる生産者が、厨房や畑を飛び出してレストランに登場！ 曽爾村の米農家から、「お米」づくりのこだわりについて伺う。素材の魅力などの話をしたあと、料理長による料理教室を行い、スペシャルランチをいただく

曽爾産野菜の販売支援(BtoC)

そにのわマルシェ（隔週金曜）

・地域内循環の創出

村民や村内の飲食店が村外のスーパーにわざわざ野菜を買いに行く、村内の農家がわざわざ村外の市場に出荷する、といった「わざわざ」の解消へ。農家自身が価格を設定するため、収入が底上げ。

・にぎわいの場の創出

観光客向けのイベントではなく、村民同士が生き生き交流する場を生むことで、対外的な魅力も生まれる。

そにのわマルシェ・ネット便
（毎週木曜発送）

・地域外の方の家庭の食卓へ発送

オンラインストアを開設し、コロナ禍で外出が難しい都市部の住民に野菜や加工品の詰め合わせを発送。

おうちで曽爾セット2500円～（野菜＋加工品）
季節のお野菜セット1500円～（野菜）

曽爾テロワール便（毎週木曜発送）

・奈良市内の飲食店に曽爾産野菜を宅配。毎週月曜に出荷可能リストを提示し、受注分を農家に出荷依頼、木曜日に集出荷する。

曽爾産野菜の販売支援（BtoB）について

≪最近の傾向≫
村外から曽爾村で農業を始めたいという移住者が増加
（少量多品目栽培、有機栽培を指向する方が多い傾向）

<u>農業形態に応じた販路の確保・提供</u>
・JAならけん曽爾出張所との連携（トマト部会、ホウレンソウ部会）
・BtoCの販路　（そにのわマルシェネット便、テロワール便）
・BtoBの販路 【新たな流通の仕組みの構築】 ※必要とする相手先につなぐ

☆JA、農林業公社が協力し合って農家の販路をカバー＝曽爾村の農業人口拡大

奈良県中央卸売市場オーガニック流通推進協議会との協働

市場再整備の一環で、有機農産物をウリにできる市場を目指すため、県関係者、卸売業者、仲卸業者、産地などで協議会を構成（モデル産地：曽爾村）

令和4年度

有機栽培・慣行栽培を比較し、有機栽培への理解を深めるために通年で「栽培技術・経営力向上研修会」のプログラム化

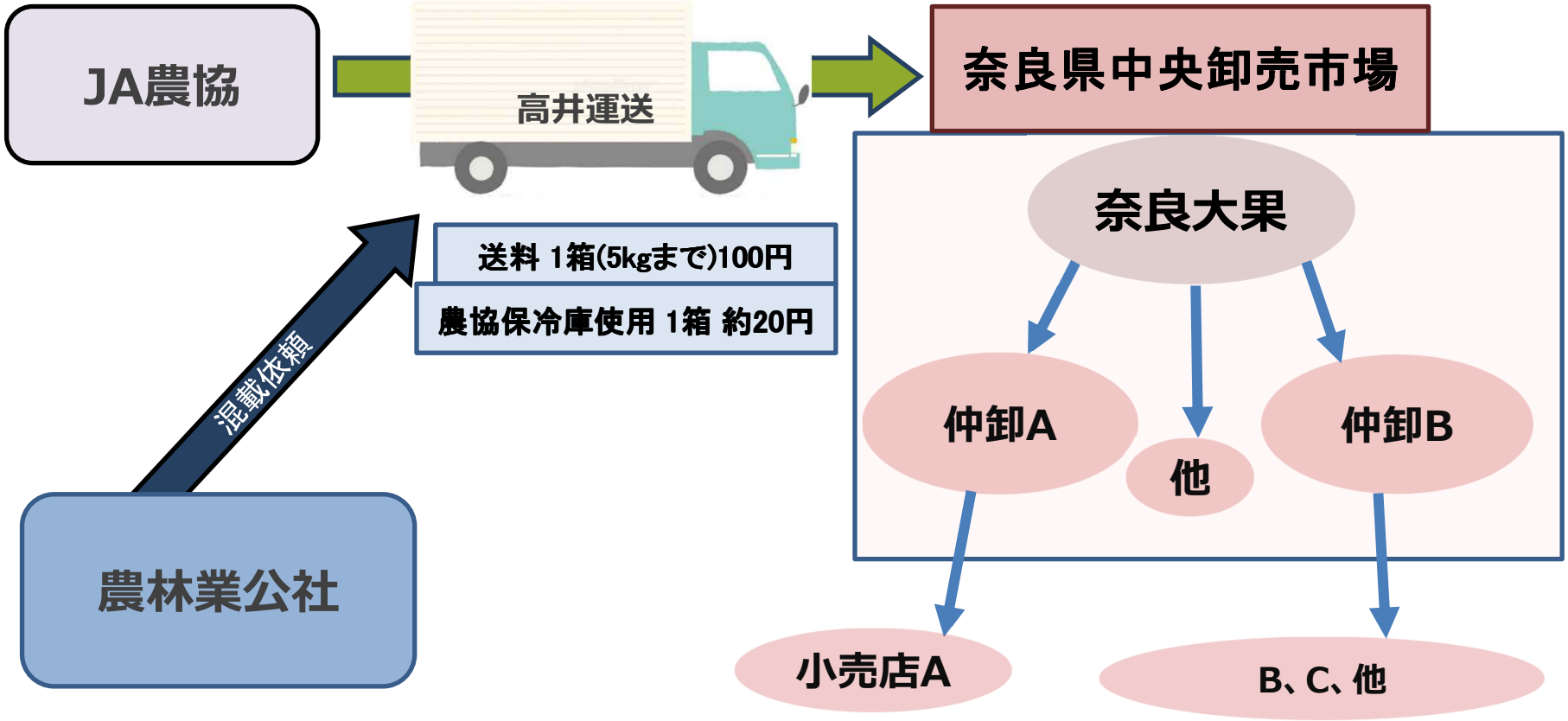
有機農業に対する既存農家の理解醸成

令和5年度

奈良市場を活用した流通網の整備の実証実験を実施

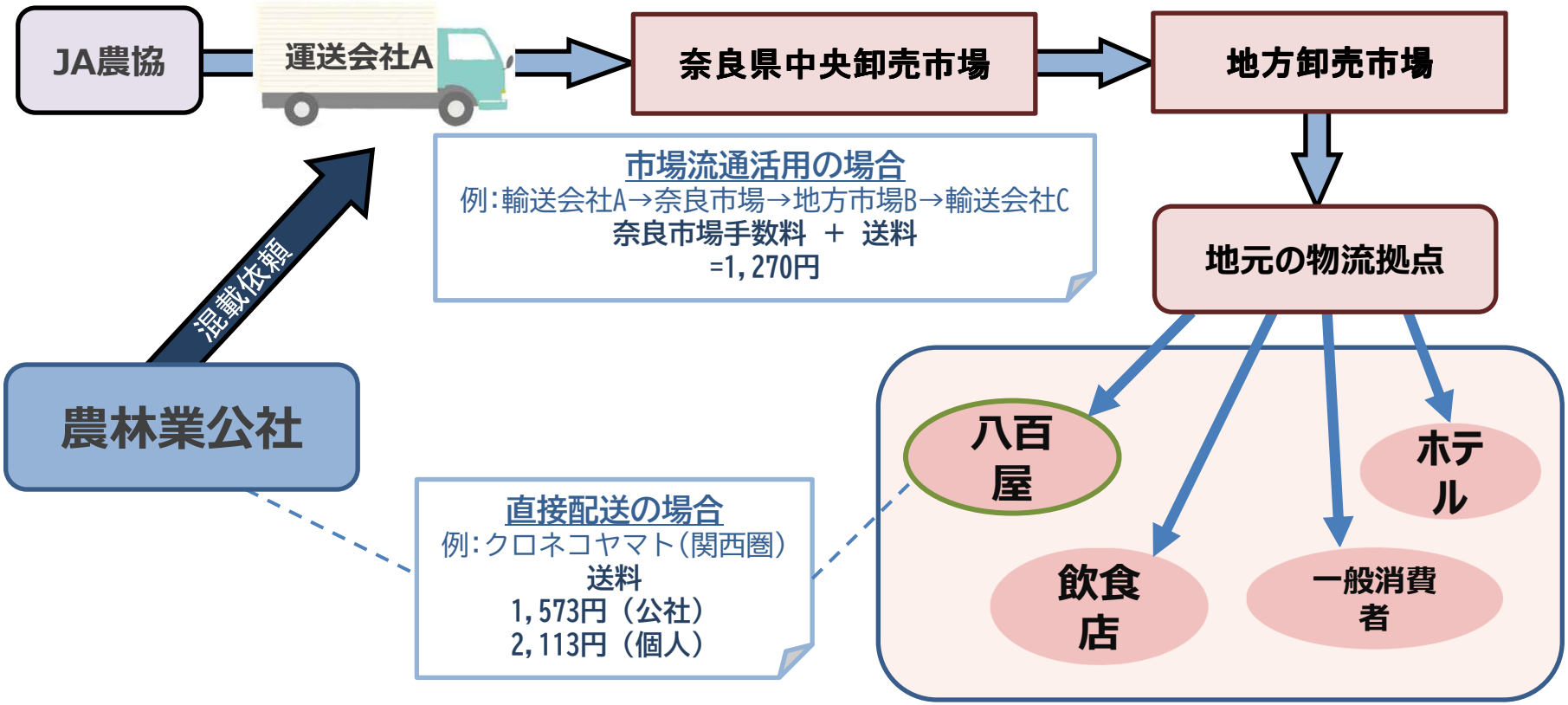
物流問題が深刻化する中、輸送コストを抑えながら付加価値を乗せて取引できる実需者への販売ルートを構築し、農家所得を最大化。新規就農の呼び水にも期待

奈良市場を活用した県内流通



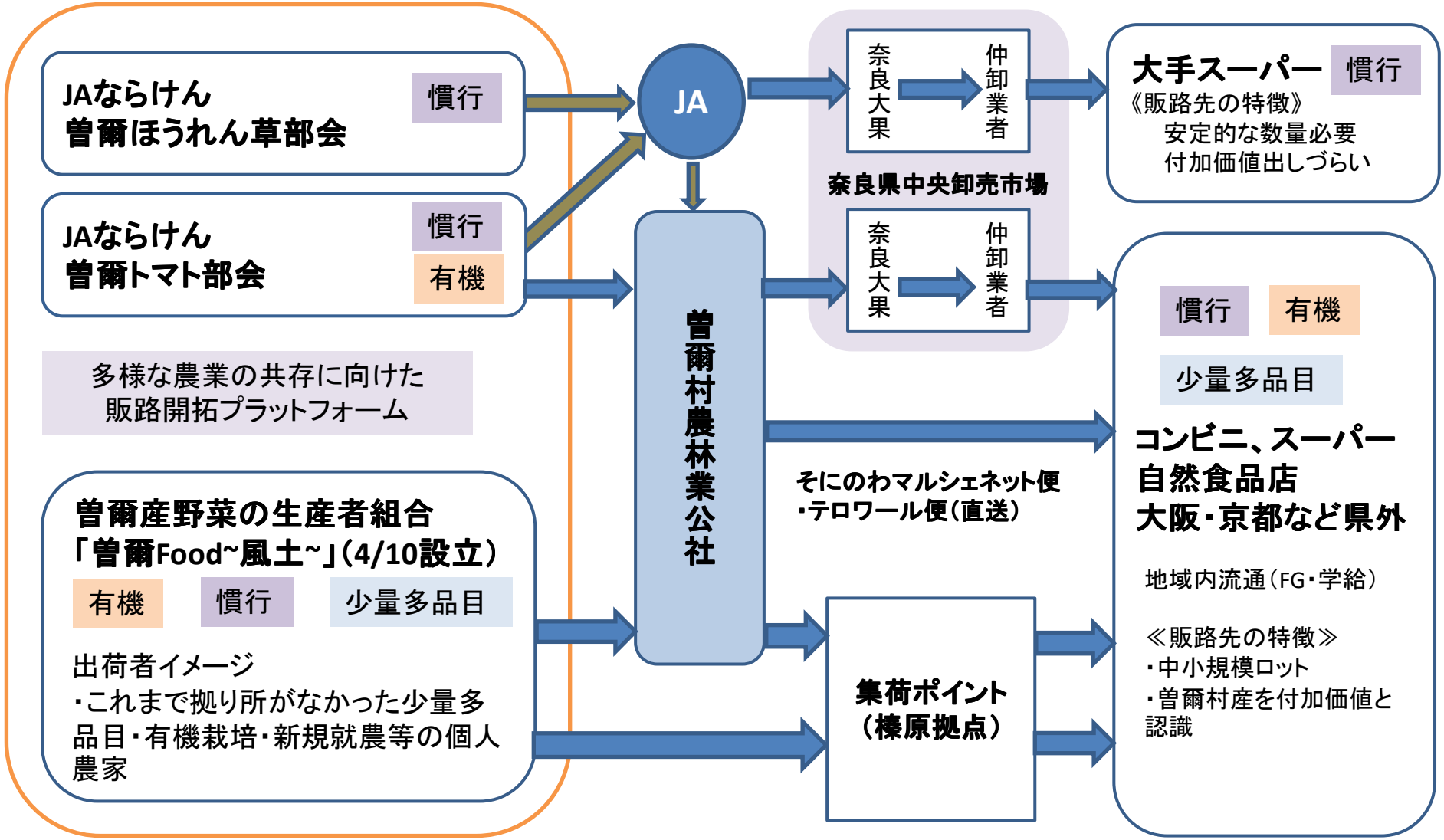
奈良市場を経由した県外流通

※クール120サイズ(15kg以内)の　野菜を京都へ1箱出荷する場合の試算



曽爾村における農林業公社の役割・関係性

～持続可能な産地形成に向けた新たな流通スキーム～



それぞれが協力し合って農家の販路をカバー ⇒ 曽爾村の農業人口拡大

生産者組合
「曽爾風土soni food」

☞生産者有志が令和5年4月10日に設立

☞構成メンバー
・これまで拠り所がなかった少量多品目・有機栽培・新規就農等の個人農家

☞主な事業

①流通合理化（共同配送便）事業
榛原便など個々が配送しているルートを集約化し、生産者が営農に専念できる環境を整える

②技術向上事業
生産者同士の圃場視察で技術向上を図るほか、地域交流、互いの農作業サポートなど「結」にも取り組む

③大きな受け皿の形成事業（農林業公社連携）
共通のブランドロゴを立ち上げるほか、野菜の個性・生産者の個性をPRする。類農園、ハンサムガーデンなど、生産者の顔が見える売り場とマッチングし、曽爾Foodの野菜のファンを形成していく。

50年後の曽爾村の農地を守るため、若手が多様な栽培方法で農業に取り組むのを受け入れられる器のある村を目指す

トマト、ホウレンソウ栽培だけでない、個性的な農産物が育まれるイメージが村に根付き、農業を志す人がさらに集ってほしい

食と農の地域内循環＋副業の場創出

「そにのわの台所katte」の立ち上げ・運営

㊤旧加工場　㊦シェアキッチンイメージ

SHERE　KITCHEN 菓子、惣菜･弁当、瓶詰、アイスクリーム、清涼飲料水			
	前室	SHERE ROOM 料理教室･ 体験ワークショップ	SHOPROOM ＋DESIGN

玄関

≪現状≫　*好立地も活用できず衰退／「使いたい」ニーズはある*

約３０年前に開設し、蕗の佃煮や桑の実ジュース等を製造していた村農産加工場だが、使いたくても特定の人しか使えず、十分に活用されていない。

≪概要≫　*食を中心としたにぎわい・学びの場として再生*

十分に活用できていない農産加工場をリニューアルし、地域住民などが自由に集い、商品開発・製造したり料理教室などができる製造許可付きシェアキッチンとして再生する。

- ケチャップ・ジュース･菓子等加工品づくり
- 惣菜･弁当の配食サービス
- 郷土料理教室加工体験ワークショップ
- 体験ツーリズムとの連携

≪期待できる効果≫

・女性農業者や移住者の**副業支援**（女性活躍・移住促進・六次産業化）
・村ならではの**土産物のレパートリー増**（観光客の満足度向上）
・高齢者向けの配食サービス等、新たな**地域ビジネスの創出**
・地元の食材を使った料理・加工体験のプログラム化で魅力的な**観光コンテンツが増加**
・これらの実施を通して**地域資源（地域価値）が見直される**

食を通じて地域を結ぶ

「そにのわの台所katte」の立ち上げ・運営

〇製造許可付きキッチン・ワークショップスペースのレンタル（1時間500円～）
〇村の素材を使った加工品を目下開発中、商品の開発・販売もサポート

商品開発講習会

マルシェの運営

郷土料理ワークショップ

近大農学部生にも
絶賛サポート
いただいてます！

そにのわマルシェ(2020.7-)

食を通して地域を結ぶ「出張マルシェ」

・役場前で開かれるマルシェは行きたくても遠くて行けない
・移住者が大勢来てくれているが、なかなか話す機会がない

・村内９集落（大字）の公民館など人が集まりやすい場所に出張
・地域の方の憩い・移住者との交流など、食を通して地域を結ぶ場を提供

山粕地区（11/17)

太良路地区（11/24)

近畿大学 KINDAI UNIVERSITY × そにのわ SONINOWA

≪トマトソース開発の背景≫

〇農業実習を受講した学生４人が
その後も曽爾村に通い農業サポート

〇規格外トマトは市場に出荷できず
廃棄することも…もったいない！

規格外トマトを有効に使った新たな商品を
開発できないか模索

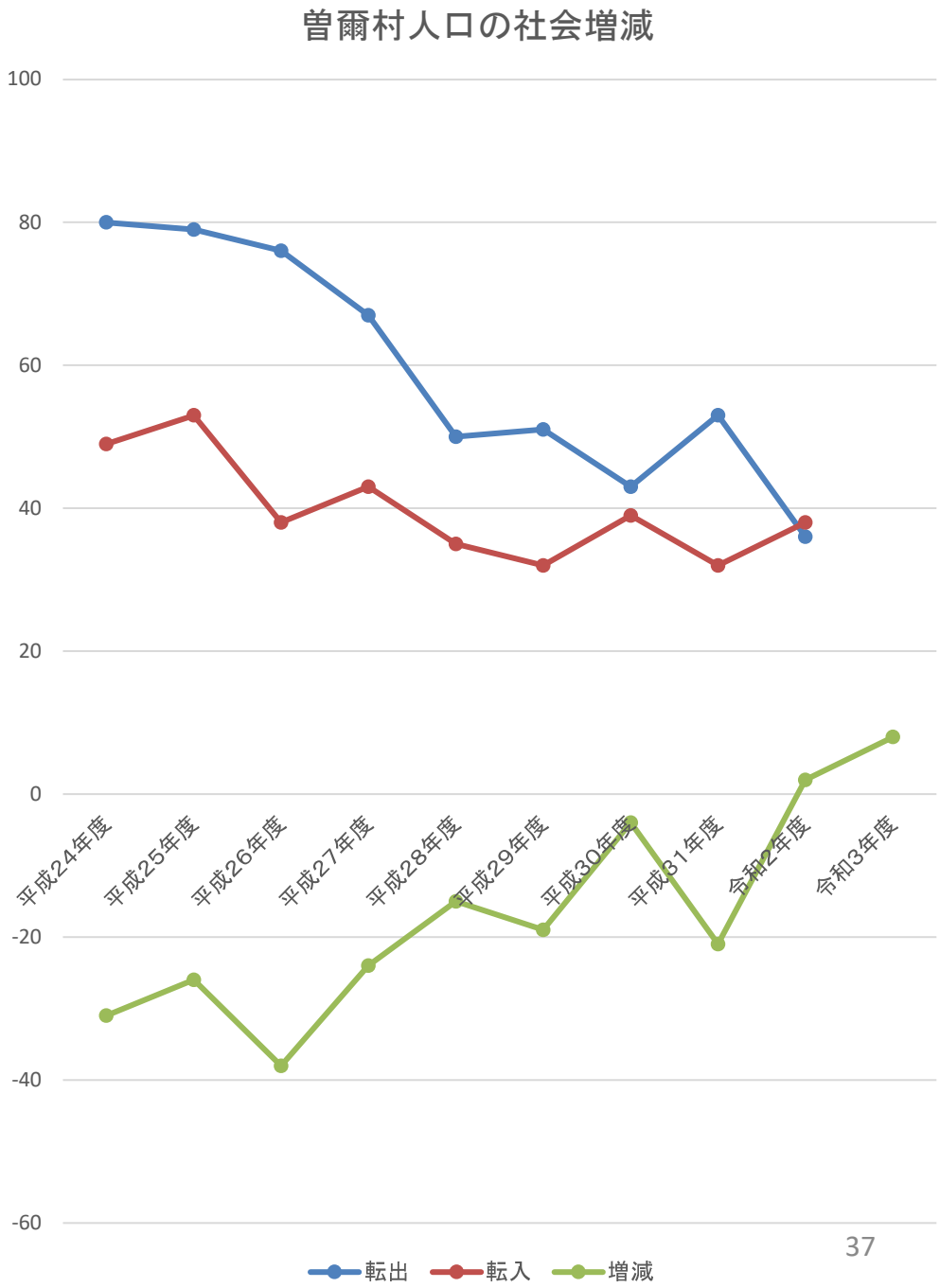
**そにのわの台所katte（曽爾村役場）と
近大農学部の学生が曽爾村産の素材を活かした
オリジナルトマトソースを共同開発**

令和2年度：人口の「社会増」現象
転入者数が転出者数を上回る

曽爾村人口の社会増減

	転出	転入	増減
平成24年度	80	49	−31
平成25年度	79	53	−26
平成26年度	76	38	−38
平成27年度	67	43	−24
平成28年度	50	35	−15
平成29年度	51	32	−19
平成30年度	43	39	−4
平成31年度	53	32	−21
令和2年度	36	38	2
令和3年度	11	19	8

※令和3年度は8月末時点



曽爾村の未来に向けて

◎小さな村だからこそできる
　持続可能な暮らし・地域づくりを実践

◎村外への発信だけでなく、村民自身が村への愛着を深め、幸福度が高まる状態を目指します。

◎新規就農者（移住者）の増加に伴い、新旧住民が共存できる関係構築の橋渡し役も担います。

ご清聴どうも有難うございました。
曽爾村にぜひお越しください。

曽爾村農林業公社　0745-96-2112
Email　　Takamatsu.vill.soni@gmail.com
Facebook　www.facebook.com/kazuhiro.takamatsu.71
Instagram　@konotori_jp
Blog　　https://soninowa.exblog.jp
（奈良新聞生活面「農村生活泣き笑い」掲載）

◎そにのわマルシェサポーター募集中！（月二回金曜日）